

---

## 総合討論

——日中死生学研究の現状と未来

竹内整一

東京大学教授

王守華

中華日本哲学会名誉会長

【竹内整一】 それでは、総合討論を始めます。総合討論の進め方として、池澤先生と斬先生にお互いに総括した議論に対してコメントをしていただき、それを皮切りに「日中死生学研究の現状と未来」というテーマに沿って討論していただきたいと思えます。

【池澤優】 今の斬先生のご発表を聞き、大変うまくまとめておられ、私もあのような形で発表すべきだったかと思えました。ただ、私の能力をもつてしては、東大および日本における死生学関係の研究状況をまとめることは無理であると思えます。とは言いつつもある程度の総括は必要であり、それは私の仕事であると思っております。そこで、日本側の主催者であるこのCOEプログラムがどのような形で何を目指しているかをまずまとめて、そのうえで斬先生のご論文に関して、日本と中国の研究状況を比較して質問をするという形をとりたいと思えます。

私たちのこのプログラムは、もともと二〇〇二年に「二十一世紀COEプログラム 死生学の構築」として始まり、今年度（二〇〇八年度）更新され、「グローバルCOEプログラム 死生学の展開と組織化」という名称で継続しています。

言うまでもなく、われわれの念頭には、欧米における「死生学（死学）」(thanatology, death studies)の伝統がありましたし、その影響を受けています。しかし、欧米におけるタナトロジー (thanatology)には乗り越えるべき限界があるというのが、われわれの出発点になります。

欧米における死生学の流れも多様であり、簡単にはまとめられませんが、その研究状況としては、第一に文献研究——歴史的研究としての特に宗教（キリスト教）の死生観研究というものがあり、その他にも記述的な研究として人類学のようなものもそこに含まれているのだと思います。それとは別に第二の分野として、より規範的視点、倫理研究のような形での死の哲学の研究というものがあって、一九七〇年代以後は先ほど述べました生命倫理のような形で展開していると言えるだろうと思います。三つ目の分野として、これも生命倫理が出てくるのとはほぼ同じくらいの時期に出てくるのですが、より実践的な研究として、たとえばホスピスやターミナル・ケアのように実践と関わる分野への関心があり、それが現在ではいわゆるタナトロジーという分野を大きく構成しています。だいたいこのように欧米の状況はまとめられると思います。

このような欧米における死生学の研究状況には、大きく二つの問題点があるのではないかとわれわれは考えています。一つは、実践的な問題関心と歴史的な文献研究との間に、ある種の乖離、断絶のようなものがあるということです。第二に、言うまでもないことですが、欧米の死生学研究は関心が欧米に偏っており、他の文化のことはあまり考えていないという点です。

それに対して、私たちが構築を目指している「死生学」は、より包括的・体系的な構築を目指すために、三

つのポイントを考えています。

一つは、アジアに重点を置いて、死生の文化、死に関する文化について広く理解するという比較研究です。どのような文化、考え方、現象があるのかについての研究です。これが第一の土台です。

もう一つは、現実、実践の現場に対する関心です。これが二つ目の土台になります。前のものを比較研究だとすれば、こちらは実践です。

そして比較と実践によって知識の体系を広げたいうえで、その上にそれらを理論化し——哲学とも倫理とも言うてよいと思いますが——、再構築するということが三つ目のポイントです。この三角形が私たちの目指している死生学の構造だと思っています。

そのうえで靳先生にご質問したいのですが、靳先生の論文を拝読した限りでは、死生哲学（死の哲学）と死に関する実証科学を、ある程度分けて考えておられるのではないかという感じがするのですが、中国においてはそれを一つのものとして融合しようとする試みはなされているのでしょうか。もしなされているのであれば、それがどのような現状であるのかをお聞かせいただければと思います。

【竹内】 どうもありがとうございました。池澤さんの方から、日本のわれわれがやっているCOE「死生学」プロジェクトの現状について報告があり、それを踏まえたうえで、靳先生の包括的な論文に対するご質問がありました。それでは、靳先生、よろしくお願ひします。

【靳鳳林】 私自身、もともと倫理学を専門として研究をしてきたものですから、やはり死生学を哲学的なレベルで研究しておりますし、中国国内の研究状況を見ても、一番多いのは哲学レベルの研究であると言えます。

私を知っている限りでもさまざまな死生学の書物が出されており、その領域も多岐多様です。ただし、思想的・基礎的分野では、死亡学、死亡に関する美学、心理学や哲学等の書物が多くあるものの、応用・実践分野では、研究している人はいるのですが、文献の数は少ないです。たとえば鄭教授の『死亡学』、私の『死亡現象学』などは、基本的には哲学的観点から書かれたものです。

思想的レベルの研究と応用的・実証的レベルの研究をどのように融合していくかについては、今申しましたとおり書物としては少ないのですが、たとえば鄭先生の『死生学』は基本的には哲学的視点で書かれてはいるものの、そのなかでは葬儀や祭祀についても触れられており、ある意味では両者の融合が図られているのではないかというふうにも感じています。

このことには、死生学という学問の基本的な定義が十分になされていないことが大きく関わっているように思います。定義づけがなされていないままでは、どういう分野を設けて研究していくのかも不明瞭なままです。ですから、抽象的な研究の進め方、あるいは具体的・実証的研究との連携などに関して、われわれがこのような研究会議を通して共通認識を持つことが、まずは必要でしょう。そういう共通認識を踏まえてはじめて、両者を融合させることが可能になると思います。ご質問へのお答えは以上です。

それでは、今度は私の方から池澤先生の論文に関して、少しご質問させていただきたいと思えます。池澤先生の論文は、一か月前にいただいた時点から、じっくり読ませていただきました。四つの質問を用意したのですが、時間の制約もありますので、一つに絞ってうかがいたいと思います。

先生は論文のなかで、世界には生命倫理に三つのタイプがあるとおっしゃっていました。一つはアメリカ方式で普遍的な理性を踏まえたタイプ、もう一つはヨーロッパタイプ、そして三つ目は相互関連性を特徴とする日本的なタイプということでした。このことについてですが、この三つ以外のタイプもありうるのではないで

しようか。たとえば、イスラム世界の生命倫理は、アメリカ、ヨーロッパ、日本、中国のいずれとも大きな違いがあることはご存じだと思います。

もう一つおたずねしたいのですが、先生のお考えでは、世界で普遍性のある生命倫理の構築は可能性としてあるかどうか、そしてその倫理に絶対性はありうるかどうかということについておたずねいたします。

【池澤】 最初の、三つのタイプしかないのか、というご質問については、先ほどの発表でも少し触れましたが、三つどころではないだろうと思います。三つというのは、あくまでも、私が読んだ範囲では、ということです。実際、私が今日扱った儒教的生命倫理も、この三つのなかには入っていないと言つてよいと思います。これは、調べれば調べるほど数は増えることはまちがいないと言えるでしょう。

二番目に、私が発表したようなことを超えて、普遍的なもの、絶対的なものの獲得が可能かどうか、というご質問です。おそらくこれは、個人的な思いがかなり入ってくる部分だと思えます。私の個人的な感覚としては難しいと思っておりますが、同時にありうるとも思えます。つまり、近代的な理性ということ以外に、たとえばエンゲルハートがやっているような形の、別途の普遍的な何かを構築することは可能ではあると思うのですが、実はそれをやった途端に、そのなかにはすでに一定のもののお考え方が入っている危険性があると思うのです。実はエンゲルハートもそうではないかと私は考えています。彼は「普遍的にして内容のない倫理」というように言いますが、「人間というものはアグリーメント (agreement) を与えることのできる存在だ」と言つた時点で、実は内容がないどころか、十分に内容のあるものになつていないか、というのが私の感覚です。私はどちらかというと、普遍的なものということには、クエスチョン・マークをつけざるを得ないという考えです。



佐藤康邦氏

私にとっては衝撃的でした。

われわれ大多数の日本人は仏教の形で葬式をします。それはまったく形骸化したものだというふうに末木先生が昨日ご発表なさったわけですが、形骸化したものであっても、お坊さんが来てお経を唱えてくれる、お経のなかには古い人類の精神についての知恵が込められているわけで、それで普段まったく仏教の信仰の薄いわれわれでも安心していられるというところがあるのです。

現在、人類四十五億人のほとんどが、死の儀礼では宗教的な形をとっていると思うのですが、中国の場合、近代史の独特の条件があり——そのなかには日本の責任もあるわけですが——宗教的儀礼なしですましている。それにしても、宗教なしに死の儀礼、死の観念というものが、一般の民衆において処理できるものなのか。伝統的思想ということを含め、池澤先生はおっしゃいましたが、知識人ならともかく、一般の民衆が伝統の宗教儀

**【竹内】** ありがとうございます。死生学での、思想レベルと応用レベルでの応接の問題、またその普遍化可能性の問題は、今後ともさらに議論していかねばならないものかと思えます。それではフロアのみなさんと議論をしていきたいと思えます。

**【佐藤康邦】** 斬先生の今のご質問もそうですが、昨日の夕食を食べながらお話をして、斬先生が死生学のなかでも葬儀の問題に特別関心を持っておられるということでお話をうかがっているうちに、ある重要なことに気がつきました。中国では葬儀において宗教的儀礼はもはやほとんどやっていないということが、

礼なしにはやっていけないのではないか、という不安を感じます。それに関してはどうお考えでしょうか。

【斬】 ここまでに私と池澤先生があまりにも長くお話ししてしまいましたので、できればこの質問は専門家の鄭先生にお答えいただけないでしょうか。

【鄭曉江】 死の儀礼に関してですが、昨年の下半期に、國務院で葬儀に関する国の規定の改正について討論会が行われました。私が聞いた話では、毎年二九〇万人が亡くなっているわけですから、国家としてはできるだけ早く死者たちを処理してしまいたい、と考えているのです。

一方、たとえば先日上海で中国民生部の副部长（副大臣）と議論したとき、「上海では年間十万人の死者が出るが、人生が終わるところのケアはなかなかできない。施設もないし、大変なことである」と言っておられました。つまり、国家の立場からすれば儀礼を疎かにする理由はそれなりにあるわけですが、実際には中国は地域も広く国民も多く、さまざまな文化伝統があるので、宗教に類似した信仰が多様に存在し、葬式のなかにも反映されているのです。個人の考え、あるいは視察から得た経験では、各地域で、特に農村や田舎の方ではそのような宗教儀礼がずいぶん増えてきています。国家としていかなる考えがあろうとも、民間では信仰による葬儀がかなり行われているのです。たとえば農村の方では、「先生」と呼ばれる人がそういった宗教的儀礼を行っています。また各地方ではそれぞれに異なる儀礼がなされています。これは各地域での信仰と関わっているものと思われれます。

また、都市における人口の多さは、儀礼との関わりで大きな問題になります。儀礼を行うことを家族が望んでいても、その施設が整備されていないので、十分な対応ができていないのが現状です。

先ほど触られたように、中国は近・現代において革命が行われた特別な国で、革命活動によってすべての宗教的要素を排除したのですが、葬儀の改革もその革命の一環だったわけです。しかし、二十一世紀に入ってから、宗教をバックグラウンドとした葬儀や儀礼がどんどん復活し始めています。個人の経験ですが、そのような宗教儀礼でもって葬儀を行うことは、死者の親族にとつて大きななぐさめになると認識しています。中国は国が大きいし人口も多いので、すぐには改革を進められないかもしれませんが、時間がかかるかもしれません。しかし、全体的な流れとしては宗教的色彩のある葬儀がどんどん復活しています。北京の天寿堂などに行けばおわかりになりますが、そのなかには仏教とキリスト教の教会のような施設が整備されています。おそらく今後、葬儀の儀礼は中国全土で復活していくと、私は予測しております。

**【竹内】** どうもありがとうございました。今の葬送儀礼の問題は、本当に大きな問題かと思えます。それに関連しての議論が昨日から何度か出てきているのですが、朱先生は「死を知り、命を知り、天を楽しむ」と言われ、鄭先生もまた「生死を等しくしてそこで平然と人が死んでいける、死を楽しむのだ」といったようなことを言われました。そこに、今の儀礼の問題もからんでくると思えます。つまり、「生死が一つで等しい」、「天を、あるいは命を、われわれは知ることによつて平然と死んでいくことができる」、というのは、具体的にどういうレベルの認識の問題なのでしょうか、そしてそうしたものを手に入れる手立て——儀礼なり習慣なり、あるいは修行なり信仰なり、いろいろな段階があるかとは思いますが——はどうありうるとお考えなのでしょうか、また以上のことに関連して中国の現状ではどのような宗教的、形而上的な観念がリアリティーを持っていてのか、ということをお聞きしたいと思います。



【張三夕】 バックグラウンドについて少し補足説明をいたします。中国では「葬儀協会」と呼ばれる協会組織があります。これは民生部に所属しています。そのなかには十名からなる専門家委員会があり、私と鄭先生もそのメンバーです。専門家委員会のなかには、宗教学の専門家、心理学の専門家もいます。特に今研究しているのは、葬儀と宗教儀式をどのように融合していくのかという問題です。実質的には、民間の葬儀においては宗教的要素がかなり取り入れられています。たとえば沿海地域ではいわゆる仏教式のやり方で、音楽も仏教的な音楽で葬儀が行われています。

【靳】 鄭先生のお話の補足を若干したいと思います。中国は今、大きな改革のさなかにあります。なかでも、中国共産党は伝統文化の重要性を認識するようになりました。つい最近の一つのトピックですが、「清明節」——これは中国の伝統的なお墓参りの節句ですが、この日を正式に休日にし、土日を含めて三連休としました。そうすると、一般の国民はどのようにこの休日を利用していくのか、考えるわけですね。これまでの葬儀、埋葬、祭祀について考えることになると思います。そのようななかで、やはり伝統文化のなかの重要性がわかってきますので、転換期のなかでどんどんこういう宗教的要素が増えてきていると感じています。

【王守華】 鄭先生、張先生、靳先生、ありがとうございます。

【李聡（吉林大學講師）】 吉林大学の李聡と申します。

死学は一九六〇年代にはじめてアメリカで唱えられ始められたものです。日本では一九七〇年代に正式に死生学の研究がスタートしたわけですが、中国では傅偉勳先生がはじめて死亡学を唱えられました。そのなかで

は二つの死亡学——広義の死亡学と狭義の死亡学が唱えられています。広義の死亡学は臨床医学、精神医学、歴史学、心理学、美学など、全体的な学問を統合したのですが、狭義の死亡学は、生と死の体験に基づいた人間の知恵を記すようなものです。ですから、死生学のなかでは、学問的なレベルと個人の階層に基づいた知恵・知識といったような、二つのものがあるわけです。

この二つをどのように区分けしていくのか。第一には論理的にどう構築していくのか、第二には実践面・応用面ではわれわれのどういった経験を踏まえながら研究していくのかということが大事だと思います。ですから、理論と経験の両面が問題になるわけですが、これには宗教的な、特に仏教的な考え方を応用し、形而上と形而下の関係で解決していくべきだろうと思います。形而上で理論化したものを形而下へ浸透させていくというようなことになるのではないかな、と思っています。

【森秀樹】 今、李先生がおっしゃったこと、それから池澤先生がまとめられた比較と実践と論理、これもとても大事なことだと共感しています。また、理論的な研究と実証的な研究も両輪だと思っています。

私はこの会議に参加して、「死」というものが生活の現実と非常に密接な関係にあり、切っても切れないものであることを痛感しました。要するに、死というものをどういうふうに生きていくときの契機にしていくな、そういう問いを死生学は問い続けなければならないのだらうと思います。私が、以前に死生学の本を編集したときも、そのように、具体的な「死」というものの現状を考えるべきだ、という方針をとりました。日本社会では現実には非常に死が隠蔽されている。それにもかかわらず、ひどいことが日本で起こっている、それに対してわれわれは何を契機にして、死についてどう問い続けられるか、を考えたいわけです。

ただ、私が一番言いたいことは、私たちは死の前では、死を適当に処理したり、うまく丸め込んでしまうこ



森秀樹氏

とはできないということです。むしろ、死というものの「わかりにくさ」を引きずって生きていく以外にない。死の学問というのは、論理にせよ現実にも、技術的な処理に終わることなく、常に死と「正対」してそのことをわれわれの人生に生かしていくという姿勢がないと、たとえばイデオロギーのようになってしまいます。死の普遍的な倫理、テーゼができた途端に、先ほど池澤さんがおっしゃったように、新しい解釈が生まれる。そこでわれわれが一つの論理を選ぶ場合、ずいぶんいろいろなものを切り捨ててしまうわけです。昨日、私は大分辛口のことを申し上げましたが、断章取義というのもだいたいそういうところに入ると思います。そこでそのようなことを避け、技術的に、現実も理論も含めて処理してしまうということをやめ、死というものを常に問いつけるという姿勢が、死生学が学問である以上必要ではないかと思えます。

【李萍】 まず、竹内先生の出された天と道の哲学が認識概念なのかというご質問に対して、若干ご説明したいと思えます。天と道は、第一には認識的な概念であると考えられます。それと同時に第二にはそれは、政治的な理念、道徳、イデオロギーでもあるわけです。中国の天と道は徳（モラル）によって実践的に成し遂げられています。ですから、中国では、天と道、天道、本体論というものもあるし、それらが徳によって実践的に実現されていくことも唱えられています。これは日本哲学や西洋哲学の徳（モラル）と同じではないと言えます。

次に池澤先生にご質問したいのですが、先ほど池澤先生が、東

京大学の死生学の研究には三つのポイントがあるということをおっしゃって、そのなかで、アジアで広く比較研究を展開していくというポイントを示していらっしやいました。そこで、何をベースにして、何をベンチマークとして、どういう具体的な哲学のコンセプトをもって比較研究していくのか、そしてどのようなレベルでの比較研究を行うのかということをおたずねしたい。比較研究をする際に、なにかコア・コンセプトがなくてはならないと思うのですが、そのコア・コンセプトは何かを教えていただければと思います。

もう一つ池澤先生におたずねしますが、現実的あるいは実践的な側面に対する注目を述べていらっしやいましたが、アジアに重点を置くということであれば、中国あるいは韓国の臨床的な実践にも注目されることになるでしょうか。

【竹内】 ありがとうございます。先ほかがったのは、今、中国の人たちの具体的な生活のなかで——森下さんの表現で言えば、コモンセンスのなかで、どれだけのリアリティーをもって語られているのか、ということをお聞きしたかったのですが、今ご説明いただいた、天や命が政治になり、同時に道徳、宗教となるということは日本でも同じなので、われわれ自身の問いとしてもあらためて考えてみる問題だと思えます。

【池澤】 私への質問が二点ありましたが、時間がないので手短にお答えします。

まず、比較研究において何がベースになるのか、統一的な視点が必要ではないかというご質問だと思いますが、統一的な視点はある意味ではあることはあるのですが、それはまだ複数あるという段階です。つまり、歴史研究にせよ、人類学的研究にせよ、思想研究にせよ、死に関する比較的な視点はすでにある程度の蓄積があり、そのなかではおのおのベースはあるのです。ただし、そのベースをまだわれわれは一つに統合していきませ

ん。現状では統合しようという段階にもなっていない。複数的存在にしていると書いていいと思います。これが第一点です。

第二点は実践的な側面においても他文化に注目するかということでしたが、もちろんそういうことになりません。たとえばホスピスなどを考えるうえで、国内の例は当然ですが、国外の例も見ないといけません。それは必須ですので、当然そういうことになります。

【王】 時間の制約もありますので、質疑応答はこのあたりで終わらせていただきます。最後に竹内先生より、総合討論についてのとりまとめをお願いいたします。

【竹内】 「東アジアの死生学へ」と題して、死生学の問題をとりわけ東アジア、特に中国と日本の違いという問題に限定して討論してきたわけでありますが、死生学ということ、特に東アジアの死生学として構造化し言語化することの非常に難しい問題もさまざまに提出されたかと思えます。こうした問題には、いろいろな幅広い、また奥深い文化・伝統が、特に東洋——中国、日本には厚い歴史的な文化・伝統があるわけです、その違いを含めた多様性もあるわけです。そうしたものを、それぞれ現代に特有な状況において、いかに有効なものとして掘り起こしながら考えていけるか、本当に大事な問題だと思えました。そのためにも、今回のように交流し合うことが大切でして、この問題は、これからもこうした形ですつと研究し続けていく必要があると痛感いたしました。二日間、どうもありがとうございました。